

校長室より

二松学舎大学附属高等学校
校長 鶴飼敦之

「二松から飛翔へ」～ 一期一会 ～

2 学期始業式 ～避難訓練・自分の命は自分で守る～

皆さん、おはようございます。

長かった夏休みが終わり、いよいよ2学期のスタートです。

1学期の終業式では「睡眠の大切さ」についてお話ししましたが、この夏はどうでしたか？ 猛暑日が続き、寝苦しい夜も多かったと思いますが、しっかり眠って、脳も身体もリフレッシュできたでしょうか。

さて、今日9月1日は「防災の日」です。「災害は忘れたころにやってくる」と言われますし、「備えあれば憂いなし」という言葉もあります。普段から意識して備えておくことが、とても大事です。

この夏も、防災について考えさせられる出来事がありました。

7月30日、ロシアのカムチャツカ半島沖で大きな地震が起き、日本各地に津波警報が発令されました。覚えている人も多いでしょう。ちょうどその時、本校の剣道部と理数科研究部が千葉県の上野市で合同合宿をしていて、津波警報を受けて急きょ高台に避難しました。引率の先生や宿舎、地元自治体の方々の指示に従い、全員無事に避難し、幸いにも大きな被害はありませんでした。

この経験は、私たちに大切な教訓を与えてくれます。

地震や津波、豪雨、そして猛暑による熱中症など、私たちは日常の中でさまざまなリスクに囲まれています。「自分の命を守るために、いざという時に何ができるのか、どう行動すべきか」を、普段から意識しておく必要があります。

皆さんがまだ幼かった2011年3月、東日本大震災が発生しました。

2万2千人を超える方が亡くなり、行方不明となりました。私は当時、西新宿の都庁の29階にいて、あの大きな揺れを直接経験しました。外を見ると湾岸エリアで火の手が上がり、その後、テレビには港や町を飲み込む津波の映像が繰り返し映し出されました。それはCGなんかではなく、現実でした。

三陸地方には「津波でんでんこ」という言葉があります。「津波が来たら、迷わず自分だけでも高台へ逃げなさい」という意味です。自分の命は自分で守る「自助」の大切さを、あの震災は私たちに強く教えてくれました。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」という言葉もあります。どうか災害の教訓を忘れず、今日の避難訓練にも真剣に取り組んでください。

(以下略)

『大阪万博』行ってきました

『2025大阪・関西万博』のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」です。すべての人が自らの望む生き方を考え、持続可能な社会を共に創り上げることを目指しています。現代は、多様化する価値観や急速に進化するAI・バイオテクノロジーなど、これまでにない変化が押し寄せています。その中で、最先端の技術や未来のライフスタイルを「体験」できることこそ、万博の醍醐味であり価値であると実感しました。

万博に出かけたのは2005年の『愛・地球博』以来20年ぶり。今回は夏休みを利用して訪問しました。

会場は朝から大勢の来場者で活気にあふれ、パビリオンやイベント会場では長蛇の列ができていました。人気の展示では待ち時間が4時間を超えることも。私が見学した「いのちの未来」パビリオンでは、本学・二松学舎が提供した「夏目漱石アンドロイド」が来場者を出迎えていました。漱石がまるで生きているかのように語りかける姿に、多くの方が足を止め、真剣に耳を傾けていました。教育と文化を未来に橋渡しするこの展示に、二松学舎の取組みが息づいていることを誇らしく感じました。

万博は単なる「見学の場」ではなく、「未来社会を考える場」。皆さんにも、最先端の技術や体験を通して、自分たちの将来や社会への貢献を考える機会を積極的に持ってほしいと願っています。

